

日本倫理学会第74回大会
ワークショップ「東日本大震災から見えてきたこと（11）」

第1部

日本倫理学会 連続ワークショップ 「東日本大震災から見えてきたこと」 アーカイブ・サイトについて

2023.9.29
丹波博紀

1

本日資料のDLとアーカイブ・サイトについて

- ・ 連続ワークショップ「東日本大震災から見えてきたこと」のこれまでの情報をUPするアーカイブ・サイト(<https://3landethics.daynight.jp/>)に公開しています。
- ・ ネットで「東日本大震災から見えてきたこと 日本倫理学会」で検索するとサイトがヒットするはずで
す(スマホ・タブレット端末の場合、以下QRコードを読みこんでください)。
- ・ このアーカイブ・サイトでは、今年までの「大会報告集」原稿、「会務報告」(『年報』所収)、その他関
連資料を収めています。今後、こちらのサイトに情報を追加していきます。

このページは、日本倫理学会で第64回大会（2013年）以来実施されてきた連続ワークショップのアーカイブサイトです。

日本倫理学会 連続ワークショップ「東日本大震災から見えてきたこと」

「序文」に代えて 実施一覧 本サイト問い合わせ先 日本倫理学会HP

このアーカイブ・サイトについて

- ・ このサイトは、2013年以来、日本倫理学会で実施されてきた連続ワークショップ「東日本大震災から見えてきたこと」についての情報をアーカイブすることを目的としています。第74回大会の本ワークショップ実施責任者によって独自に運営されています。
- ・ 本ワークショップは、金井淑子・川本隆史・高橋久一郎の3名によって日本倫理学会の第64回大会（2013年）から実施されてきました。会員による「応募」企画という位置づけです。ワークショップに至る経緯は、[川本隆史さんによる「『序文』に代えて」](#)に記されています。
- ・ この間毎年欠かさず実施され、2022年第73回大会で実施回数は10回を数えました。そして、2023年第74回大会の第11回目からは、実施者として上記3名に飯泉佑介・丹波博紀の2名が加わり、この2名が実施責任者を引き継ぎました。この引き継ぎの過程で、この「倫理（学）」上の試みがいかなるものであるかを確認し、検討の俎上に載せる必要を感じ、これまでの情報をアーカイブすることにしました。→ [川本さん主催の第28回オープンZoomセミナー（2023.9.24）での発表資料](#)（飯泉・丹波）



2

2

なぜアーカイブ・サイトをつくるのか？（23年「大会報告集」より）

こうした「ふり返し」の意図（＝アーカイブ・サイトの作成）をもうすこし説明しておきたい。このワークショップは、倫理学や、これに携わる者たちが、震災・原発事故のいまだ終わらない「事実」と向き合う機会だったはずだ。それは端的に言えば、「事故」に対する自らの「位置」を省察するものであり続けてきたと言えるだろう。過去の実施記録をアーカイブ化し、その内容を「ふり返る」ことで、私たちはまずそうした、これまでの「位置」を知りたいと思う。

もちろん、これまでの「位置」を明らかにすることは、現在の、そしてこれからの「位置」を見いだすための作業である。たとえば、今回から、飯泉会員、丹波会員がワークショップの運営に加わり、実施責任者を引き継いだ。このことを多少反省すれば、そもそも「引き継ぐ」ということ自体が、震災・原発事故の「いま」に対する私たちの「位置どり」を示している。では、「私たちはどこにいるのか」——。こう自らに尋ねてみても、これに答えることは簡単なようで簡単ではない。そのための「よすが」が必要である。

また、こうした問いは、実施責任者だけのものでもない。このワークショップにかかわり、またこれからかかわるであろう、倫理学に携わる人たちの問いだとも言える。各自が答えるためにも、これまでの実施記録をデジタル・アーカイブのかたちで整理し、みなで吟味・検証できるようにすることは意味のあることだろう。

3

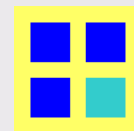
3

アーカイブ・サイトから見てきたこと①

- ・ テキスト・データ化されたことで、〈これまで本WSで何が言われてきたのか〉などについて、テキスト・マイニングすること（統計的にテキストを分析すること）が可能となった。
- ・ そこで、フリーソフトのKH Coderを用いて、全11回の「大会報告集」のテキスト・データを計量分析し、語と語の共起の程度をネットワーク図で表す「共起ネットワーク」を作成した。
- ・ この共起ネットワークを通じて、過去11回において何が議論されてきたのかを明らかにしたい。

項目	今回の設定ほか
使用ツール	・ KH Coder (3.Beta.07e)
分析テキスト	・ 第1～11回大会報告集（合計51,638字）
分析方法	・ 共起ネットワーク（出現パターンの似通った語、つまり共起の程度の強い語を線で結んだネットワーク）。
分析時の設定	・ 語の出現を「文」単位で計算 ・ 語の最小出現数を「18語」に設定し、それ以上を計算 ・ 描画する共起関係は「上位70」に設定

KH Coder公式ページ



<https://khcoder.net/>

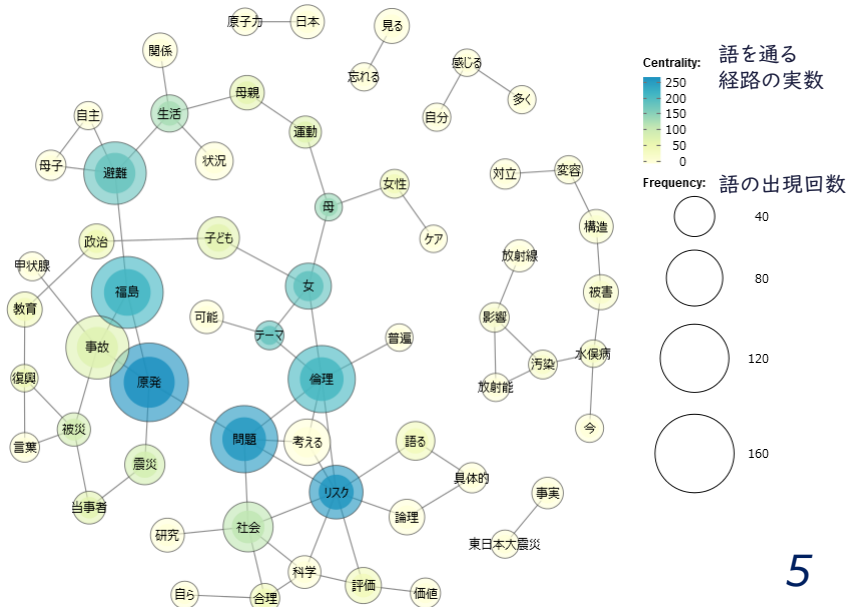
KH Coderについては主に以下を参照

- ・ 樋口耕一（2020）『社会調査のための計量テキスト分析 第2版』ナカニシヤ出版。
- ・ ———（2022）『動かして学ぶ! はじめてのテキストマイニング』ナカニシヤ出版。

4

アーカイブ・サイトから見えてきたこと②——これまでの話題の〈中心〉は？

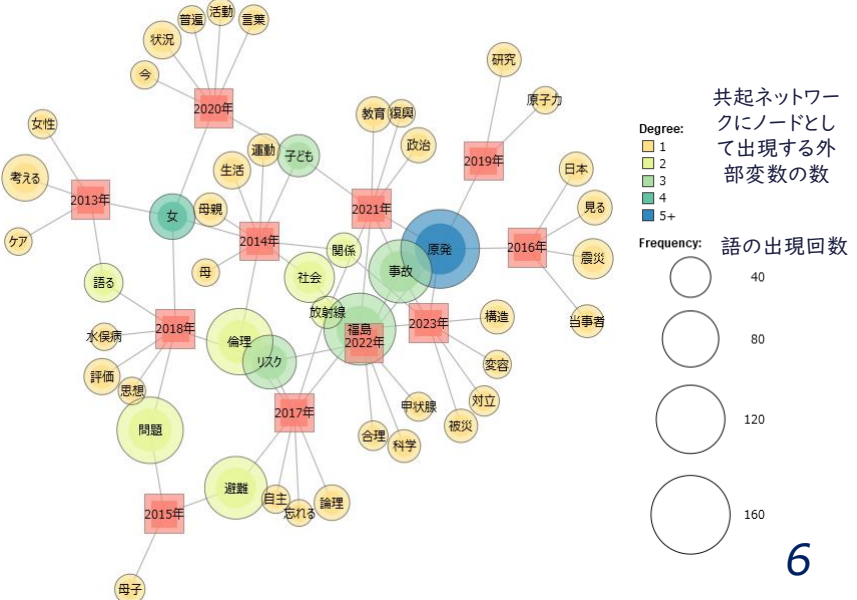
- 前ページの設定のもと、第1～11回の「大会報告集」のテキストを、ここではとくに中心性に注目して、共起ネットワークを作成した（設定：「中心性（媒介）」）。
- ここでの中心性とは、それぞれの語がネットワーク構造のなかでどの程度、中心的な役割を果たしているのかを言っている。
- 右図では、「原発」「問題」「リスク」「倫理」「女」「テーマ」「福島」「避難」「生活」「母」といった語が中心的役割を果たしていることが分かる。→ 本WSの特徴。



5

アーカイブ・サイトから見えてきたこと③——〈実施年ごと〉では？

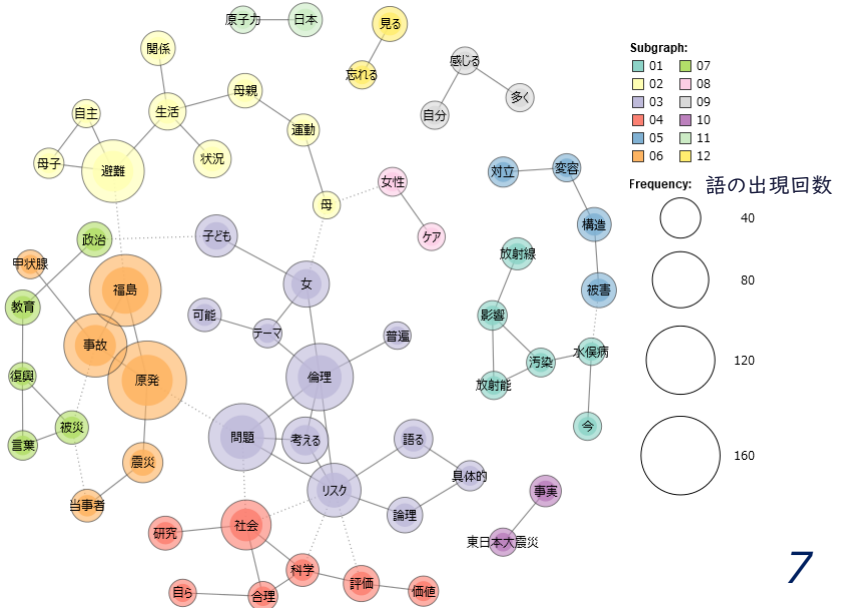
- 同一条件の共起ネットワークだが、こちらでは「実施年」を「外部変数」（テキスト以外の情報）として読み込んでみた。
- 右図では、最小出現数18以上の語に関して、それらが外部変数と一体どんな共起を描くかを見ている。実施年ごとのテーマ・トピックの特徴を掴むことができる。
- なお、凡例のDegreeとは、ある語（たとえば原発）がネットワーク上、いくつの外部変数と結びついているかを示している（原発の場合、5つ以上の実施年と結びついている）。
- ここから「原発」「女」「子ども」「福島」「事故」「リスク」が特に複数年にわたり話題となってきたことが分かる。



6

アーカイブ・サイトから見てきたこと④——話題の〈バラエティー〉は？

- 同一条件の共起ネットワークだが、こちらでは、比較的強くお互いに結び付いている部分を自動的に検出してグループ分けをおこない、その結果を色分けして示している（設定：「サブグラフ検出（random walks）」）。
- この色分けを参考にして、**第1～11回の「大会報告集」中に多く現れたテーマ・トピックについて検討することができる。**
- なお、同じサブグラフに含まれる語は実線で結ばれているのに対して、互いに異なるサブグラフに含まれる語は破線で結ばれている。



7

当初の「もくろみ」を確認し・これからを展望する

東日本大震災からのテーマという、何回か継続的に行いたいと考えているワークショップの全体としての狙いは、（私の「もくろみ」としては）『年報』に載せた昨年度の統一テーマの総括で述べたように、「生命」という価値を基軸に、これから先の倫理を考える上で、この大震災から見てきた幾つかの核となる概念、例えば、リベラルといった理念やリスク分析といった手法の意義（と限界）を検討し、必要ならば大きな枠組みの中でのそれらの位置づけを考え直す可能性についての議論を試みることにある。

「余りに大きすぎる風呂敷」を拡げていると思われようが、ワークショップだからこそ拡げられる風呂敷だと考えている。その上で、今回のワークショップで狙いは、基本的にリベラルな枠組みのもとにある現代の倫理「学」において、「女・こどもの倫理」は無視されてはならないマイノリティの「要求」であるというだけではなく、むしろ「女・こどもの倫理」こそが、普遍的な倫理の枠組みである可能性を考えることにある。

（高橋久一郎「第64回大会報告集」〔2013年第1回WS〕）

8

当初の「もくろみ」を確認し・これからを展望する

計量テキスト分析をつうじて、この11年間テーマこそ多様であったが、おおむね当初の「もくろみ」どおり展開されてきたことが確認された。今後の展望は？

東日本大震災からのテーマという、何回か継続的に行いたいと考えているワークショップの全体としての狙いは、(私の「もくろみ」としては)『年報』に載せた昨年度の統一テーマの総括で述べたように、「生命」という価値を基軸に、これから先の倫理を考える上で、この大震災から見えてきた幾つかの核となる概念、例えば、リベラルといった理念やリスク分析といった手法の意義(と限界)を検討し、必要ならば大きな枠組みの中でのそれらの位置づけを考え直す可能性についての議論を試みることにある。

「余りに大きすぎる風呂敷」を拡げていると思われようが、ワークショップだからこそ拡げられる風呂敷だと考えている。その上で、今回のワークショップで狙いは、基本的にリベラルな枠組みのもとにある現代の倫理「学」において、「女・こどもの倫理」は無視されてはならないマイノリティの「要求」であるというだけではなく、むしろ「女・こどもの倫理」こそが、普遍的な倫理の枠組みである可能性を考えることにある。

(高橋久一郎「第64回大会報告集」[2013年第1回WS])